

第105回 休日の午後のコンサート。

2025.8.10(日)14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール
Sun. Aug. 10, 2025, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

〈ノスタルジック・クラシック〉 〈Nostalgic Classics〉

指揮とお話 出口大地 Daichi Deguchi, conductor & speaker

ギター 荘村清志* Kiyoshi Shomura, guitar

コンサートマスター 近藤 薫 Kaoru Kondo, concertmaster

ビゼー：組曲『アルルの女』第2番より「ファランドール」(約4分)

Bizet: Farandole from L'Arlésienne Suite No. 2 (ca. 4 min)

タレガ：アルハンブラ宮殿の思い出* (約5分)

Tárrega: Recuerdos de la Alhambra (ca. 5 min)

ロドリゴ：アランフェス協奏曲* (約24分)

Rodrigo: Concierto de Aranjuez (ca. 24 min)

— 休憩 intermission —

C. ルスティケッリ：鉄道員* (約3分)

C. Rustichelli: Il Ferroviere (ca. 3 min)

M. ルグラン：シェルブールの雨傘* (約5分)

M. Legrand: Les Parapluies de Cherbourg (ca. 5 min)

ボロディン：交響詩『中央アジアの草原にて』(約9分)

Borodin: Symphonic Poem "In the Steppes of Central Asia" (ca. 9 min)

ボロディン：歌劇『イーゴリ公』より「だったん人の踊り」(約14分)

Borodin: Polovtsian Dances from opera "Prince Igor" (ca. 14 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 / Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan | Japan Arts Council

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために ♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけません場合がございますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

♪ All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned. ♪ Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed. ♪ Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance. ♪ Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

出演者プロフィール

指揮とお話 出口大地

Daichi Deguchi, conductor & speaker

第17回ハチャトゥリアン国際コンクール指揮部門にて日本人初の優勝。クーセヴィツキー国際指揮者コンクール最高位及びオーケストラ賞受賞。

関西学院大学、東京音楽大学指揮科にて学び、2023年ハンスアイスラー音楽大学ベルリン指揮科修士課程修了。ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団、アルメニア国立交響楽団等の指揮を経て、東京フィルハーモニー交響楽団定期演奏会で日本デビュー。以降日本各地のオーケストラへデビューが続いている。リエージュユワ立フィルハーモニー管弦楽団のアシスタントコンダクター(2024/5シーズン)。

広上淳一、クリスティアン・エーヴァルト、パーヴォ・ヤルヴィ、ドナルド・ラニクルズ、井上道義、沼尻竜典、下野竜也各氏らの薫陶を受け、ベルリン放送交響楽団ではヴラディミール・ユロフスキ氏のアシスタントを務めた。

公式ホームページ <https://daichideguchi.wixsite.com/daichideguchi>



©hiro.pberg_berlin

ギター 荘村清志

Kiyoshi Shomura, guitar

実力、人気ともに日本を代表するギター奏者。9歳よりギターを始め、1963年に巨匠イエペスに認められ、翌年スペインで師事。74年NHK教育テレビ「ギターをひこう」、2007年同「趣味悠々」に講師として出演し、日本ギター界の第一人者としての存在を強く印象づけた。08年ビルバオ交響楽団の定期演奏会に出演。同団とは『アランフェス協奏曲』を録音しリリースも行う。15年にはイ・ムジチ合奏団と共演、録音も行った。17年から4回にわたり「荘村清志スペシャル・プロジェクト」を開催し、さだまさし、coba、古澤巖、錦織健らと共演。ジャンルの垣根を越えたコラボレーションが話題となる。最終回では、cobaに委嘱したギター協奏曲も演奏し、注目を集めた。20年、書籍「弾いて飲んで酔いしれて ギターとともに50年」(吉田純子編著)を出版。22年、coba編曲による世界のポップス名曲選『ゴッドファーザー～愛のテーマ』をリリース。東京音楽大学特任教授。2024年にデビュー55周年を迎えた。

公式ホームページ kiyoshishomura.com



©Hiromichi NOZAWA

プログラム・ノート

解説=柴田克彦

郷愁漂うサウンドに心置きなく浸る

今回の「休日の午後のコンサート」は〈ノスタルジック・クラシック〉。曲自体がノスタルジックな哀愁を湛えた作品や、古くから親しまれているノスタルジックなクラシック名曲が登場します。

重要なポイントはギターの莊村清志の出演。ギター自体がノスタルジックな音色を持っている上に、同楽器の第一人者が郷愁漂う楽曲を披露するのですから、そういったムードに心置きなく浸ることができます。ギター音楽のソロと協奏曲の代表作を続けて生体験できるのも貴重な機会。そしてギター+オーケストラ用にスペシャル・アレンジされた映画音楽の名曲が陶醉の世界へと誘います。

東京フィルではお馴染みになりつつある俊英指揮者・出口大地が、古いファンなら懐かしさを感じるクラシック作品をいかに聴かせるか? も大いに楽しみ。聴き慣れた名曲が、ノスタルジーとは逆に新鮮な活力を帯びた音楽として耳に届く……今回はそんな期待に胸が膨らむコンサートでもあります。



マエストロ出口の指揮とトークとともに、哀愁を湛えたギターの音色を存分にお楽しみください

躍動感あるファランドール舞曲で幕開け

幕開けはフランスの天才**ジョルジュ・ビゼー**(1838-1875)の組曲『**アルルの女**』第2番より「**ファランドール**」です。『アルルの女』は歌劇『カルメン』と並ぶビゼーの代表作。フランスの文豪ドデーの劇の付随音楽で、1872年に作曲されました。物語は「南フランス・プロヴァンス地方の農村の青年フレデリは、アルルの町で知った妖艶な女に恋するも、家族に反対され、幼なじみの村娘と婚約する。だが祭りの日、家に来たアルルの女の情夫から『今夜駆け落ちする』と聞くと、身を投げて命を絶つ」といった悲劇です。

ビゼーは小編成の音楽を27曲作曲し、気に入った4曲を通常編成の組曲に編曲しました(=組曲第1番)。そしてビゼーの死後、友人の作曲家エルネスト・ギロー(1837-1892)がやはり4曲から成る第2番を編纂。その終曲=第4曲「**ファランドール**」は、単独演奏の機会が極めて多い名作です。

曲は劇の最終場面の音楽。特殊な太鼓が効果を発揮するプロヴァンス地方の舞曲です。民謡「3人の王の行列」を用いた行進曲から、村人たちが踊る舞曲に移り、2つの旋律が交錯する熱狂のクライマックスを迎えます。



Bizet

エルネスト・ギロー
(1837-1892)

ギターが奏でる古雅な香りと哀愁の旋律

ここからはギターの演奏が続きます。まずはソロで、**フランシスコ・タレガ**(1852-1909)の「**アルハンブラ宮殿の思い出**」。「禁じられた遊び」と並ぶギター独奏曲の代名詞ともいえるナンバーです。スペインが生んだ“近代ギター之父”タレガが1890年代、南スペインの古都グラナダに残る中世イスラム文化の遺跡、アルハンブラ宮殿を訪れた時の印象に基づいて作曲したといわれ、全編で奏されるトレモロが郷愁を醸し出します。



Tárrega

前半最後は、20世紀スペインの代表格 **ホアキン・ロドリゴ** (1901-1999)の『**アランフェス協奏曲**』です。今度はギター協奏曲の代名詞的な作品。中でも第2楽章の主題は、ジャズやポピュラー音楽にアレンジされ、広く親しまれています。



アランフェスは首都マドリードから47キロ南の高原地帯にある土地の名。かつて宮廷の離宮が置かれたオアシス的な場所で、4歳で失明したロドリゴは、若い頃に訪れた際、同行した夫人の説明と共に当地の空気を味わいました。そしてその感覚に基づいて1939年に完成させたのが本作。ロドリゴ自身は『『憂愁につつまれたゴヤの影、貴族的なものと民衆的なものが溶け合っていた18世紀スペインの宮廷の姿』を描いた』との旨を語っており、民族情趣と共に漂う古雅な香りや哀愁が魅力をなしています。

第1楽章(アレグロ・コン・スピリト)は、冒頭に奏されるリズムが支配する中で、優美な主題が展開されます。**第2楽章(アダージョ)**は、イングリッシュ・ホルンが提示する憂いを帯びた旋律を軸に運ばれる、静謐な音楽。**第3楽章(アレグロ・ジェンティーレ)**は明るく軽妙な変奏曲風の終曲です。

往年の名画から切なさを帯びた2つの名曲

後半最初はギターと管弦楽による映画音楽の有名曲を2つ。まずは**カルロ・ルスティケツリ** (1916-2004)の代表曲『**鉄道員**』が演奏されます。ルスティケツリはイタリア屈指の映画音楽作曲家。ピエトロ・ジェルミ監督&主演による1956年のイタリア映画『鉄道員』は、初老の鉄道機関士の姿を幼い息子の目を通して描いた感動作です。そのテーマ曲は、どこか切



ない映画のトーンを反映した名曲で、ギターでもしばしば演奏されています。

続いては**ミシェル・ルグラン** (1932-2019) の「**シェルブールの雨傘**」。フランスの作曲家ルグランは、映画音楽を中心に創作を行い、ジャズ・ピアニストとしても活躍しました。『シェルブールの雨傘』はジャック・ドミ監督の1964年フランス・西ドイツ合作映画。やはり切ないこの恋愛映画は、大女優カトリーヌ・ドヌーヴの出世作として知られています。またこれは史上初めて全編音楽で構成されたミュージカル映画でもありました。実質的な主題歌たる当曲は、駅での別離のシーンで流れる哀愁を帯びたナンバーです。



異国情緒と華麗な色彩感に満ちた音楽

ここで管弦楽だけの演奏に戻り、**アレクサンドル・ボロディン** (1833-1887) の代表作が2曲披露されます。ボロディンはロシア国民楽派“5人組”の一人。ペテルブルグ医科大学で学び、同大の教授や研究活動の傍ら作曲を続ける“日曜作曲家”でしたが、激務と並行して東洋的な名作を生み出しました。



最初は交響詩『**中央アジアの草原にて**』。1880年、ロシア皇帝アレクサンドル2世の即位25周年記念祝賀行事のために書かれた作品です。原題は「音画『中央アジア』」で、「草原にて」は西欧で付け加えられたもの。兵士たちに護衛されながら草原を旅する隊商が、徐々に近づきまた遠ざかっていく様子が描かれています。クラリネットが提示する「ロシアの歌」とイングリッシュ・ホルンが提示する「東方の旋律」の両主題が巧みに用いられた音楽で、エキゾチックな美感や広大な草原における遠近感が注目点となります。

次いで**歌劇『イーゴリ公』**より「**だったん人の踊り**」がプログラムを締めくくります。『イーゴリ公』は、1869年に着手されたものの、多忙と相まって未完に終わった作品。5人組の仲間リムスキー＝コルサコフとその弟子グラズノフが補筆完成し、1890年に初演されました。全体の内容は12世紀キエフ公国(ウクラ

イナ)のイーゴリ公の愛国物語。ただし彼は、遊牧民族だった人(正確にはポロヴェツ人)と戦うも、捕らわれて捕虜となり、脱出して国に戻ります。

「だったん人の踊り」は、捕虜となったイーゴリ公を、彼に一目置く敵将コンチャーク汗がもてなす酒宴の余興パフォーマンス。異国的な情緒と華麗な色彩感に溢れた音楽は、単独で頻繁に演奏されています。まず(その前に快速調の「だったんの娘たちの踊り」が加えられる場合もあります)優美で悲哀に満ちた「娘たちの踊り」が奏され、エネルギッシュな「男たちの踊り」、ティンパニの打撃を伴う激烈な「全員の踊り」、軽快な「子供たちの踊り」が続きます。その後は各舞曲が交替し絡み合いながらクライマックスを形成。畳みかけるように終結します。



しばた・かつひこ(音楽ライター) / 音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、Web、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)、「吹奏楽編曲されているクラシック名曲集」(音楽之友社)。